

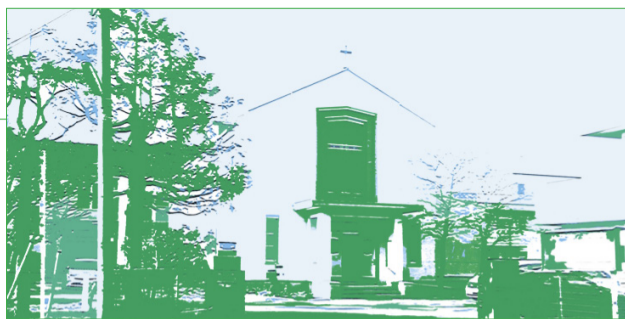


瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、9:30am



復活徹夜祭説教 Christus vincit.

小西 広志 神父

四旬節が始まったときから、ずっと黙想していることばがあります。それは "Christus vincit." です。復活祭によく歌われる歌があります。"Christus vincit, Christus regnat, Christus imperat." 日本語にすれば、「キリストは勝つ、キリストは支配する、キリストは統治する」という意味です。その「キリストは勝つ」ということばをずっと思い巡らせてきました。今も思い巡らせています。

"Christus vincit." で思い出すことがあります。かつてアンジェロ・アショッフという宣教師がいました。サクソニア管区出身の方です。一時期、聖母病院のチャプレンも務めていたと思います。晩年、神戸にいらしたのですが、わたしが志願者の時にお会いしたことがありました。その時、この歌にまつわるお話しをしてくれたのを覚えています。彼はベルリン大学でシナ学の学位を取得しました。戦前、シナ学という中国に関する学問の領域があってベルリン大学がとても盛んでした。アンジェロ神父さんは、さらにシナ学を学ぶためにこの学問の権威であるハーバード大学でも学んだそうです。およそ十年間、漢字を学び、中国語をマスターし、中国の文化を研究したそうです。それはすべて中国で宣教するためでした。アメリカから船に乗り、いよいよ中国に渡ろうとしたとき、上海の港で上陸が許可されなかったそうです。中国共産革命のせいです。あれほど一生懸命勉強したにもかかわらず、一度も中国本土で中国語を話すことなく、結局そのまま帰ることになりました。ちょうどその日は復活祭の日で、復活祭のミサもできなくて船室にいと、どこからともなく "Christus vincit, Christus regnat, Christus imperat." の歌が聞こえてきたというのです。それで確信したそうです。必ず、キリストは勝利して、中国の共産革命は終わると。そんな話しをうかがったのは、中国が経済開放を始めた頃でしたので、アンジェロ神父さんは、ほらご覧下さい。キリストは勝ったんですよと言っていました。わたしは、この話しを聞いて、いい話しだなと思う反面、ある主義主張、あるイデオロギーの衰退がキリストの勝利だとする考え方に少し違和感を覚えました。

また、もう一つ思い出すのはイタリアで勉強していた頃のことです。ラジオでヴァチカン放送を聞くと十五分おきぐらいに、この歌のメロディーとアナウンスが流れてきました。インターバル・シグナルというのですが、どうもそれがなじみませんでした。キリストの勝利は、すなわち教会の勝利というような理解が時代錯誤的で嫌いでした。

そんな思い出のある "Christus vincit" ですが、今年の四旬節、ふところの中によみがえってきました。そして考えたのです。今のこの時代に「キリストの勝利」とは一体何だろうと。COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が猛威をふるっています。多くの人々が犠牲となっています。ウイルスは目に見えません。不安がつります。誰かからウイルスをうつされるかもしれないと思うと、周りの人を信じられませんか。不安だから人々のところはささくれ立ってきました。ちょっとでも咳やくしゃみをしていたらにらまれます。マスクをしないで街を歩くと嫌がられます。「三密」（密閉、密室、密集）を避けよと呼びかけられたから、人と人の距離が広がりました。そしたらところどころの距離も広がりました。今、この時代は不安の中でお互い信頼しあえない社会となりつつあるようです。そして、不安は人を閉じこめてしまいます。不安で信頼できないから、人はこころを閉じていきます。外出を自粛させられているから、家の中に閉じこもっているのでしょうか、その結果、人と人との関わり合いは薄らいでいきます。たまたま買い物に出かけると、そのうっぶんをはらそうと、必要のないものまでも買ってしまうし、ときには店員につらくあたってしまう。さらには不安は恐れをもたらします。見えないものへの恐れです。

こんな時代に、「キリストの勝利」とは一体なんなのでしょうか？ そのことを考え始めたら、なかなか答えが出てきません。世界中で聖職者たちが、街を清めるために聖水を通りにまいています。あるいはご聖体で街を祝福しています。ある司祭は小型飛行機に乗って、上空からご聖体で地上を祝福しています。誰も真面目にやっているのですが、どうもわたしにはなじみがない。かつての勝利主義の教会の香りがよみがえってくるようで好きになれないです。

全世界で、特にイタリアで多くの司祭たちが COVID-19 でいのちを落としていきました。彼らは危険を冒してまでも、死にゆく人々の傍らで顔を近づけて最後の告解を聞き、罪のゆるしを与えました。感染するかもしれない思いながらも、素手で死にゆく人々に触れ、病者の油を塗ってあげたのです。そんなところに、わたしは「キリストの勝利」の一端を見るような思いがします。

多くの観想修道会では、特に北米の観想修道会では、マスクや防御服を作る作業を始めました。決して広い部屋ではない裁縫室で、一生懸命、ていねいにマスクを作っています。そこに「キリストの勝利」を垣間見るように思うのです。

多くの医療従事者たちが、不安と恐怖に打ち勝って、疲労が重なる中で感染した患者のために働いています。一日中、医療用のマスクをつけたその顔にはくっきりとマスクのひもの痕が残っています。自分のいのちを差し出して、他者のために尽くす姿が「キリストの勝利」とは無関係ではないように思えてなりません。

ミサがないことは残念です。それでも、インターネットの配信を通じて典礼への霊的な参加をしていく信徒がいます。今年はいつにも増して、十字架の道行きに訪れる信徒が多かったです。これは「キリストの勝利」の姿といえないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症に打ち勝とうと首相は国民を鼓舞しています。今は戦時であるとアメリカの大統領は言いました。七十年も前の国民の不安をあおりながら、精神論で戦意を高揚させようとした出来事が再現されたかのようです。そんな今の時代、不安と不信の時代、一国のリーダーのことばが信頼できない時代、真偽のハッキリしないことばだけが飛び交い、それに右往左往されるこの時代にあって、「キリストの勝利」とは一体何だろうと思うのです。

いつか、小教区のミサは再開されるでしょう。再び、教会に人が集まり、よろこびと感謝の典礼をささげるでしょう。つらいときだったけど、ご聖体はいただけなかったけど、わたしたちは最後までキリストに結ばれた兄弟姉妹だったね、と、もし誰もが言えるとしたら、それこそが、この世に対する「キリストの勝利」だと思います。

大司教様は「主は世の終わりで、いつも共にいてくださいます」（マタ 28 章 20 節参照）と復活の主のことばをもって、わたしたちを励まします。フランスコ会の総長は Do not be afraid; darkness has not conquered the light! 「恐れることはない。闇は光に打ち勝たなかった」。今晚の福音のことば（マタ 28 章 5 節）とヨハネ福音書のことば（ヨハ 1 章 5 節）を組み合わせて、この困難な時を生きるようにと兄弟たちに勧められています。どちらも「キリストの勝利」を予感させることばです。

今の時代にとって、「キリストの勝利」とは何を指すのでしょうか。復活された主の姿を思い描きながら、黙想を続けていけたらよいと思います。きっとわたしたちのすぐそばに、不安と不信にあえぎ苦しむ人々の間近に「キリストの勝利」はあるのだと信じて。